

近畿地方の万葉集と風景画シリーズ（第七回）

「飛鳥古京追想の歌」

（1）六世紀末から七世紀末にかけての飛鳥の都は 推古天皇

（第三十三代）から持統天皇（第四十代）までの九代の天皇

のうちの七代の天皇と多くの天皇が宮を営み長い間、日本の

政治の中心地であったが持統八（六九四）年に持統天皇によつ

て当時、政治の中心地であった浄御原宮（遺構地・奈良県高市

郡明日香村岡）から、直線距離にして二キロメートルも離れて

いない大和三山（香具山・畝傍山・耳成山）に囲まれた広大な

ふじはらのみやこ

かしはらしたかどのまち

藤原京（橿原市高殿町・宮跡）に都が遷された。

（2）都が飛鳥から藤原京に遷都して間もなく、飛鳥の都で少年

期・青年期を過ごした天智天皇（第三十八代）の第七皇子・

志貴が、かつての賑わいを失って廃墟と化した飛鳥古京を訪

れ、詠んだと思われる次の歌がある。

あすか
明日香の宮より藤原の宮に遷りし後に、志貴皇子の
作らす歌

うねめ そでふ

采女の袖吹きかへす 明日香風

とお

都を遠み いたずらに吹く（巻一―五二）

（解説）明日香の古都に立ってみれば、采女の袖をあでやかに吹き返す明日香風も、都が遠のき、采女もいなくなつて、今はむなしく吹きすさぶばかりだ。

・「采女」とは地方豪族から天皇に献上され、食事など身の回りのさまざまな事柄を行う女官のことで、都を代表する華やかな存在であつたとの説がある。

・采女のいなくなつた飛鳥の宮を吹く風を、志貴皇子はもろもろの思いを込めて「いたずらに吹く。」とうたっている。

（参考文献）清原和義著「万葉の歌」新潮日本「万葉集」他



(写生地) 奈良県中央部付近に位置する明日香村の中心にある標高148mの緩やかな丘である国営飛鳥歴史公園(明日香村豊浦)の展望台から東側眼下に采女が袖をひるがえ翻してそぞろ歩いたと思われる飛鳥寺を中心としたと明日香の集落地域と、その奥の高台には本シリーズ第四回で掲載した天武天皇が藤原夫人に詠んだ歌「わが里に 大雪降り 大原の 古りにし里に降らまくは後」の舞台となった明日香村小原を描く。(池田杏花)